



洗足学園音楽大学
洗足こども短期大学
附属図書館

図書館便り

第16巻 1号
2025年12月22日発行



目次

【創立101周年特別企画】

大学学部長インタビュー 江原 陽子 先生	・・・・・・・・・・	2
短期大学幼児教育保育科 科長補佐 井上 眞理子 先生	・・・・・・・・・・	10
私の推薦DVD・CD tekkan 先生	・・・・・・・・・・	11
2025年度 図書館活動報告 図書館小さな音楽会	・・・・・・・・・・	13



創立101周年特別企画

江原 陽子 学部長インタビュー

創立101周年特別企画として、図書館職員が学部長の江原先生に
お話をうかがいました。

—江原先生が洗足にいらしたきっかけは
どのようなものだったのでしょうか。

洗足と私の最初の関わりは小学校オケでした。楽器を持って4年目の児童がサントリーホールでお披露目をするのですが、それに際して当時の学部長でいらした岡田知之先生から、演奏会の司会をお願いできますか、とお声掛けをいただきました。「洗足学園小学校は楽器を持って4年目にサントリーホールで演奏できるの?! それも仲道郁代さんのコンチェルトを秋山和慶先生の指揮で?!」と驚きましたね。こどもたちの挑戦を後押ししてくれる、素敵な学校だなと思いました。



—続いて、音楽の世界に進まれたきっかけをお聞かせください。

音楽大学に進学しようと思ったきっかけは、幼いころから母と一緒に観ていたNHKの『歌はともだち』という公開収録番組です。毎週土曜日にNHKホールへ観覧しに行くほど好きな番組でした。



今でも覚えている出来事があります。小学5年生の7月の公開収録で、『ドレミの歌』を詠したことで知られるペギー葉山さんが「ドの音は？ レの音は？」と言いながら、観覧者に歌わせていくのです。私は前から7列目の一番端の席に座っていて、もしかしたらマイクが回って来るかも……、とドキドキしながら待ちました。そうするとシの音をふられ、緊張しながらも歌った記憶があります。

ペギーさんは、「あら良い声ね。歌手になったら？ さあ皆さん、『ドレミの歌』を歌いましょう」とおっしゃいました。そこで『ドレミの歌』を歌う人になろう、と心に決めたのです。「音楽に進みたいのは、『ドレミの歌』をペギー葉山さんから引き継ぎたいから」という気持ちで、小学校を卒業し、中学校に進学して何故か打楽器に明け暮れました。とにかく楽しいことをしようという気持ちが一番でした。

そうして最終的には歌で東京藝術大学に進学して、NHK『うたって・ゴー』の歌のおねえさんになりました。音楽の世界は光り輝いて見えましたね。音楽の世界は殺伐としている面がある一方、やりたいことをできて幸せでもあったのです。



—江原先生はこれまで歌や司会を中心にさまざまな分野でお仕事をされてこれ、そして現在は本学の学部長のお立場にいらっしゃいます。日ごろお仕事をされる時、どのようなことを大切するように心がけていらっしゃるのでしょうか。

学生や教職員が明るく過ごし、今日も一日良い日だったな、と思えるような環境を整えることを心掛けています。そして、日々一つでも発見や学びが増えることを願っています。

音楽大学の学生は暗い気持ちになるときもあると思うのです。課題に終わっていたり、上手くいかないことにたくさんありますから。私も学生のころにそういう経験がありましたが、ストレスは感じていませんでした。

こどものころから通い、現在教えている「(公財)ソルフェージュスクール」の先生は、たとえピアノを弾き間違えても「あら、愉快ね」とおっしゃるし、あまり練習して行かなくても怒られることはなかったです。音楽を介して泣くということもありませんでした。ただしその代わりに、「モーツァルトならモーツァルトらしく最後まで気持ちを途切れさせないで弾いてね」「ショパンならショパンらしく、わからなくなったらショパンのように作曲しても良いわよ」「初見でも良いから、一生懸命楽譜を読んで、とにかくその時間を楽しみなさい」とおっしゃいました。もちろん作曲者が紡いだ音を理解して、それを自分らしく表現するのが大切なこともきちんと教わりました。

しかし、音楽をしている自分自身がその時間を楽しいものにしなくてはダメということを学びました。

ですので、音楽大学に入学したときに、なぜこんなに人のことを気にしているのだろうかと思いました。公開試験を見に行ったら他の学生の評価をすることがありますよね。自分と他人を比べることも、他人と他人を比べることもあると思います。私自身、周りの人の言うことを気にしていないつもりでも、人が人を貶めるような言葉の応酬に負荷がかかって、身体に異変が現れるという経験をしました。自分の音楽を奏でるのに他人のことをとやかく言う必要があるのだろうか？ それなら自分を見つめ直せば良いのに、と思っていましたから。

厳しいとか暗いとか、ネガティブな感情を想起するようなものはあまり音楽的じゃないと思って育ってきました。ご縁があって洗足に来たからには、19コースの学生や教員、それを見守る職員の皆さんが嫌な思いをしないで、楽しく明るく、今日も一日精一杯やったぞと思えるようにしたいです。嫌なこともなく、今日も良い日だったと思って帰れたら、明日も来ようと思いますよね。

特に、試験やオーディションがあり、どうしても気分が落ち込むことがあると思います。そんな時に、私たち教職員が明るく声をかけてあげれば、学生たちの気持ちも上向きになると思うのです。学生の皆さんには明るい学生生活を送っていただくことが大事だと思うので、教職員みんなて目を配っています。

学部長の立場として、皆さんには楽しく、今日も頑張ったと感じながら、無事に帰ってもらえればと思っています。



—江原先生には2020年の図書館便り

『私の推薦図書』にご執筆いただき、読書がお好きであることは存じております。今回は、これまで聞いてこられた音楽や舞台、映像作品などの中から、特に印象深い作品をお伺いさせていただきます。

私を音楽の道へ導いてくれた作品

・ミュージカル映画『サウンド・オブ・ミュージック』

影響を受けた作品

- ・ドガの絵画(踊り子シリーズ)
- ・舟越桂/舟越保武の彫刻作品
- ・すえもりブックスの本
- ・岩波文庫/新潮文庫
- ・ピナ・バウシュ他、ダンスの舞台
- ・昔のディズニー作品
- ・テレビ番組『うたはともだち』
- ・テレビ番組『オーケストラがやってきた』
- ・映画『男はつらいよ』

本は語りきれないくらいですかね。特にこどものころは、なんてあんなに読めたのだろうというくらいたくさん読みました。

よく父や兄がおみやげに本を買ってきてくれました。父の「今これを読んで欲しい」という思い、兄の「これ知っとくと良いよ」という気持ちが続まっているのですね。その年相応に与えられる本には意味があるのだと思います。

人生の上で大切なことはすべて、絵本（特にすえもりブックスがお気に入り）と児童書で学んだように思います。

私がピアノを飽きずに弾くようになったのは、『エルマーのぼうけん（福音館書店）』という児童書の影響です。読みながらメロディーをつけて、2時間でも3時間でも歌っていました。本を読むことがリズムになって、メロディーになっていきました。何故か男性の文体の方がリズム・音楽的で好きでしたね。そういった観点でいうと、好きな日本の女性の作家さんは向田邦子さんと小川糸さんです。

物語も好きで、ひときわ大好きなのはファンタジーです。あとは、『大草原の小さな家』『若草物語』『赤毛のアン』など、外国の知らない土地の生活が書かれている本もよく読みました。

本で空想するのが好きだったので、小学生のころは、あの空の果てに行きたい、端っこに行ってみたい、と思っていました。妄想ができる本の世界の中はとても楽しかったです。

それに本屋と文房具屋は何時間でもいられますね（笑）。ネット通販で本を購入することもあります。できるなら本屋に行きたいです。

映画も大好きです。『サウンド・オブ・ミュージック』は強烈でした。ジュリー・アンドリュースに憧れ、水色のワンピースを着ていればトラップ大佐のような人と出会えるのだと思っていましたから（笑）。

また、クラシックバレエを習っていたことと、その稽古ピアニストを務めていた先生の影響で、バレエを観劇することとオーケストラを聴きに行くことも大好きでした。

『オーケストラがやってきた』という音楽番組を知りませんか？ その当時は山本直純さんと小澤征爾さんが出演されていて、音楽もお話しもとっても楽しい番組でした。オーケストラが好きになったきっかけの番組です。

舞踊は、ピナ・バウシュの踊りがすばらしかったのをよく覚えています。モーリス・ベジャールのボレロも観に行きました。ダンスの感動した舞台の1つです。

彫刻家では、舟越桂さんの女性の像に憧れた時期があります。「なんで、この人はこういう彫像ができるんだろう？」と、なぜかとても惹かれていました。仙台に仕事で行った際に美術館で保武さん（桂さんのお父様）の展示を見て、そこで目が釘付けになったピンク色の石像作品がありました。図録を買って大事に持ち帰り読んでいたら、そのピンク色の石は私の家の近所にある石材所のものだったのです。強い巡り合わせを感じました。そういったものに感化されるというか、やはり自分を導いてくれるもの、自分が惹かれるものは必然だなと感じます。

ですから、流れにはあまり逆らわずに生きようと思っています。何かご縁をいただいたら、先ずはやってみる、という感じです。



—図書館の思い出は何かおありでしょうか。

こどものころの夢の一つに図書館司書がありました。なぜかという、返ってきた本を元に戻す作業に憧れていたからです（笑）。

—配架したいということですか？

たくさんの本が順番に綺麗に並べてあると、すごく嬉しい。

—ぜひ、いつでも配架しにいらしてください。

本当ですか？ アルバイトさせてください（笑）！

近所の図書館の、とても美しい本の収め方に憧れていたのだと思います。並べる以外でいうと、図書館は静かな場所であるのも良いところですね。

そして、どんな人がどんな本を読むのかについてもとても興味があります。もちろん調べ物や勉強に利用していましたが、一番の思い出は人間観察ですね。

あとは東京文化会館の図書室にも通いました。居心地が良かったですよ。レーザーディスクのほかにもオペラのスコアを探しに行きました。

上野という、他には国際こども図書館が大好きでした。勝手に絵本図書館と呼んでいました。藝大のすぐそばにあったので良く通っていました。光の入り方がすごく素敵で、外国に来たような気分が大好きでした。

—小さいころは本をたくさん読まれたとうかがいましたが、図書館の利用頻度も高かったのではないですか。

そうですね。とはいっても、返しに行くのが面倒に感じていたので借りずに館内で読むことが多かったように思います。小さいころから、読んだ本のうち気に入ったものは購入して手元に置いていました。それはいまだに変わりませんね。

そういえば、昔は本屋さんが自宅まで本を届けに来てくれていましたよ。児童書を二冊ほど持ってきてもらうのですが、それが楽しみで仕方がなかったです。



—本学の図書館についてはどのような印象をお持ちでしょうか。

静かで美しいと思います。螺旋階段が美しいですね。

もっと学生が活用すればよいのにと考えています。とはいえ、今日図書館に来てみて、以前と比べて多くの学生が利用している印象を受けました。



—先生は、どのような目的で利用されますか。

絶版になっている資料は利用しますね。あとは歌曲やオーケストラスコアも借ります。声優アニメソングコースにいたころは授業に必要な資料をリクエストしたこともありますよ。やはり、コースに準じているものと楽譜の利用が多いように思います。

—図書館職員に求めることがありましたら、ぜひお聞かせください。

そうですね……。カウンターにいる職員の皆さんの目線って大事だと思います。利用者からすると、どこの部署もそうだと思いますが、ニコニコと微笑んで、必要な手助けをして、図書館の雰囲気が楽しく明るくなれば良いと思います。人はおのずとそういう場所に集まってくるから。

—コロナ禍を経てリモート会議の一般化、YouTubeなどの動画コンテンツの多様化、また最近ではAIの台頭により、図書館の役割は変わってきていると実感しております。そういう状況の中で、先生は大学図書館にどのようなことを期待されますか。

自分自身、紙に印刷されている物に興味があるので、データで楽譜を読むことにまだ馴染めません。やはり、「めくりたい」と思っています。私の感覚としては、曲を暗譜するとき、めくる作業と曲の関係は一体化されているためです。

音楽会の台本を作る際もちろんインターネットで調べることもありますが、出版されたものこそ確実な情報源といえると思うので、先端技術が進めば進むほど、図書館の存在はより大事になってくると思います。

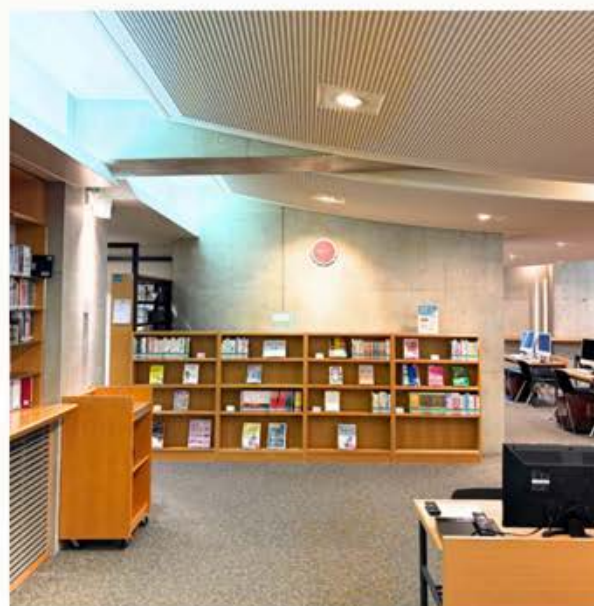


—様々な配信サイトが普及する中で、CDやDVDの需要が無くなっているのではないかという流れも見られます。しかしながら、図書館に所蔵することで、作品そのものが存在したという事実を残すことも大切ですよね。

私も強くそう思います。大事なコンテンツはどうしっかりと残していくべきです。いつか絶対宝物になります。パソコン上の資料は、何らかの制限やデータの削除などで閲覧することができなくなってしまう可能性もありますからね。

私が歌のおねえさんのときの現場には、私の隣に作曲家と写譜屋さんがいました。できたてホカホカの手書きの譜面で歌うと、作曲家のニュアンスがわかります。さらに、譜面のマスの詰め具合やその作曲家の癖で歌詞が息づいてきます。それを経験しているからこそ、実物の大切さをより感じるのだと思います。

図書館でも、良いものを残していってください。



—昨年、洗足学園は創立100周年を迎えました。今年は次の100年の節目に向けてのスタートになりますが、学部長としてのお気持ちをお聞かせください。

100年なんてまだまだです。101年目も止まりません！ 洗足はまだまだこんなもんじゃないと勝手に思っています（笑）。

一瞬「100年経って良かったね」と思いましたが、やはり先達が頑張ってくれたから100年続いたのです。ここからも大変なことが多いと思いますが、皆さんと協力して「洗足を残していくぞ！」と思っています。今、私たちはこれから先何百年も続いていく歴史の一部、つまり現時点しか預かっていません。今の運気・流れのまま、次の時代につなぎたいですね。学生さんに洗足の新しい歴史を作ってもらいたいです。これから先も「休みなんかない！」というような気持ちです（笑）。

101年も102年も真摯に向き合い続けていきたいと思っています。

—大学職員として、私たちも頑張ります。

楽しいことも苦しいことも一緒に頑張らしましょう！

—学生・教職員に向けてのメッセージやエールをお願いします。

洗足は場所でも元号でもなく、信念が名前になっている大学です。〈イエスは「もし私があるあなたの足を洗わなければ、あなたと私は何の関係もなくなってしまう。」このお互いに足を洗い合うということが「お互いに愛し合い仕え合うべき」ということを示しているのです〉学生が他者に奉仕をするだけでなく、教職員の皆さんも学生に対し奉仕の心を持つ。それは未来を託したいからです。プロを育てるのが音楽大学だと思っていましたが、この思想をもって「音楽は愛情である」と伝えていけるのは洗足学園だけだと思っています。教職員の皆さんは学生の声に更に耳を傾けてほしいです。そして学生が「嬉しい」と思えるような教育のサポートをお願いしたいです。



学生も教職員の皆さんの声に耳を傾けてほしいですし、自分たちは愛情を持って支えられているということを固く心に刻んで励んでもらえればと思います。そして、できるだけお互いの演奏を聴きましょう。先生の演奏、友達の演奏をちゃんと聴く。意外と皆さん聴いていないでしょう？ 私が学生のころはサブスクもなくレコードくらいしかなかったので、生の演奏を聴いていました。洗足はたくさんの演奏会が開かれているので、興味のあるところに足を運んでいただけたらと思います。

そして、「足を洗う」ということの大切な意味をもう一度噛みしめて、新たな時代を作っていってほしいなと思います。

本日はとても素敵なお話をありがとうございました。『洗足』の意味を胸に、これからも頑張っていきます。

表現のちから、言葉のちから

洗足こども短期大学

井上 真理子 幼児教育保育科 科長補佐

このたび、図書館だよりの執筆を依頼いただき、あらためて「図書」の価値、そして「言葉」が私たち人間にとってどのような意味を持つのかを思い巡らせました。

人はそれぞれ、多様な色彩をもった存在です。その多様性が生み出す自由な発想や価値観は、言葉を通して外に現れます。言葉は、ときに柔らかく、ときに鋭く、人と人を結ぶ糸となります。相対して思いを伝えるとき、言葉を通じて人はつながり、新しい関係と可能性を生み出します。

現代において、言葉はSNSやオンラインを通じ、会ったことのない誰かにも届きます。そして図書という形を得た言葉は、時を超えて響き続けます。ページを開けば、百年前の著者と今日の私たちが静かにつながります。言葉は、時を超えた糸となり、偉大な発見や文化を結び合わせてくれるのです。

学問も音楽も、こうした言葉や表現に支えられています。学び、音を奏でることは、ただの知識や技術の習得ではありません。そこには、人と人とがつながり、響き合い、社会や文化を潤していく営みがあります。

私は研究を通して、「多様な考えや発想を自由に伝え合うことができる組織や文化」に心を寄せてきました。人は誰一人として同じではありません。その違いは不協和音ではなく、新しい調べを生み出す和音のようなもの。違いが響き合うからこそ、世界は豊かになります。これからの時代、多様性はますます尊ばれ、互いを受けとめ合う中から新しい調和が生まれ、社会や文化が創造されていくでしょう。

洗足学園は、その多様性を先駆けて尊重し、そこから生まれる表現や発想を育ててきました。教育も音楽も、一人ひとりが自らの言葉を紡ぎ、音を奏で、思いを自由に表現し、社会に還元する。学園という舞台の上で、多様な声が出会い、響き合うことで生まれる調べは、地域社会に広がり、豊かな文化の醸成の礎となっているのです。

101年目を迎えた学園が、これからの100年もまた、多様な思いを認め合いながら、人と人をつなぎ、新たな未来を照らす光を生み出し続けることを願います。その歩みが、すべての人の幸せとなることを、心から願っています。

私の推薦DVD・CD

バーンスタイン『ウェストサイドストーリー』

tekkan 先生

(ミュージカルコース)

数十年前、私は友人に勧められ、レーザーディスクという今では貴重な媒体でこれを観たのを記憶しています。その映像作品とは、バーンスタインが自ら指揮をとり、世界的オペラ歌手達と共に名作ミュージカル『ウェストサイドストーリー』を録音する様子を収めたドキュメンタリー『メイキング・オブ・ウェストサイドストーリー』です。

トニー役にはホセ・カレーラス、マリア役にはキリ・テ・カナワ、アニタ役にタティアナ・トロヤノスという正に夢の顔ぶれてした。クラシック界のスターたちが、ブロードウェイ・ミュージカルの名曲を真剣に作り上げていく現場。その光景に、私は胸を高鳴らせたのを覚えています。

特に印象的だったのは、バーンスタインとカレーラスのやり取りで名声も実力も十分なカレーラスに対し、バーンスタインは容赦なく「もう一度！」と録音を止め、何度もリテイクを命じます。音程やリズム、そして“ニューヨークの息づかい”まで徹底して求めるバーンスタイン。クラシックを中心に活動してきた彼らはブロードウェイ的なリズム感、英語の発音、ストリートの感情表現に慣れていませんでした。カレーラスの表情にも戸惑いや葛藤がにじみ出ていました。そんな一流歌手の表情が見れるのは他にはないのではないのでしょうか。

この録音は1984年ともう随分前のものですが、バーンスタイン自身が60代半ばで挑んだ、まさに“自作への帰還”と言えるものでしょう。彼は『ウェストサイドストーリー』（1957年初演）で若き日の情熱を注ぎ込みましたが、その後はクラシック指揮者として世界を飛び回る日々でした。この再録音では、彼が「ミュージカルという形式を超えた“総合芸術”」として作品に再び命を吹き込もうとしていたのです。

プロフェッショナルであっても、試行錯誤し、失敗し、何度も挑む。当時の私はただただキャストの歌声や創作過程に感銘を受けたものでしたが、今見ても、そこにこそ創造の喜びがあるのだと気づかされます。是非このメイキング映像をみて、この収録CD『ウエストサイドストーリー』を聞いていただけたらと思います。

バースタインは映像の中でこう語ります。

“Music can name the unnameable and communicate the unknowable.”

（音楽は、言葉にできないものを名づけ、理解を超えたものを伝える力を持つ。
この言葉こそ、この作品全体を貫くテーマだと感じます。



図書館小さな音楽会

「SENZOKU Library Mini Concert」

学園祭初日10月11日、図書館小さな音楽会を開催しました。
昨年、学園創立100周年を記念し、学生の所属・コースの垣根を超えた学びや交流の場
となることを目的として生まれた企画です。
悪天候でしたが、当日は約200名ものお客様にご来場いただきました！

コンサートの内容

第一部：モーツァルトプログラム
モーツァルトの最新発見曲
「ガンツ・クライネ・ナハトムジーク」
を中心とした演奏

第二部：朗読とアンサンブル
本の朗読と演奏のコラボレーション



コンサートの様子①

第一部：モーツァルトプログラム
学部生、院生、教員が参加しました。
モーツァルトが作曲した様々な名曲のピアノメドレー
から始まり、モーツァルトに扮した学生によるアンサ
ンブルや、洗足初演の「ガンツ・クライネ・ナハトム
ジーク」は多くの来場者の方に大変好評でした。



コンサートの様子②

第二部：朗読とアンサンブル
コースの垣根を超えて編成された
グループが創り上げるお話と音楽の世界。
おはなしコンチェルトたんぽぽの会(学友会クラブ)の
「おおきなかぶ」では来場者参加型で盛り上がって
いました！



出演者の感想

「意外とお客さんが多くて良かった。通路脇にあり地理的にも集客しやすい図書館でどの年齢層でも興味が湧き入りやすい催しを行っている事はとても良いと思う。」

「初めて図書館で演奏して、1部の演奏は楽しめたのですが、2部の朗読の後ろで演奏となると、音量調整や、話に合わせて演奏するのが難しかったので、後ろですっと演奏するより、他のメンバーの方がやっていたように、読み手に合わせて効果音程度に演奏すればよかったなど、反省しています。」

「準備から大変だったと思いますが、丁寧に対応していただき、当日も可愛らしくデコレーションをしてくださっていたので、楽しく演奏させていただきました。ありがとうございます。」

お客様の感想

「様々な楽器での演奏があり、工夫もされていてとても楽しめた。特に、朗読と音楽を融合させるのは図書館のイベントとしてとても良いと感じた。」

「いつもの図書館の静かで落ち着いた雰囲気とは違って、観客と一体になる演出やお子さんたちの楽しそうな声が響き、大きなホールとは違うアットホームなコンサートで素晴らしいかったです。また機会があればぜひ伺いたいと思います。」

「演奏者との距離も近く図書館という場所で、気楽な感じで音楽が楽しめたことが良かったと思います。」

「案内をいただきたまま入りましたが、図書館でのコンサートが新鮮で良い雰囲気でした。特にガンツクライネナハトムジークが印象的でした。」